発掘調査の概要

大官大寺南方の調査（飛鳥藤原第206次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、2017年度以降、大官大寺と山田道にはさまれた地域の古代における土地利用状況を解明するために、継続的な試掘調査と地中レーダー探査を実施してきました。今回は、2019年度の調査区から100mほど南、大官大寺南門より南に約350mの地点に、藤原京東四坊坊間路の推定位置を横断するかたちで調査区を設定しました。調査期間は2021年１月13日から２月25日まで、調査面積は200㎡です。また、試掘調査地の南方・西方の約5,400㎡を対象として、地中レーダー探査を実施しました。結果は現在解析中です。

試掘調査の結果、東四坊坊間路の東西側溝に相当する南北溝を検出するにいたりませんでしたが、総柱建物１棟、南北棟建物１棟、南北塀２条、井戸１基、土坑２基を検出しました。土坑については時期不詳ですが、そのほかの遺構は７世紀後半から末に位置づけられます。

調査区の西側では比較的多くの遺構がみられました。西端部には総柱建物があり、東西３間分（約4.2m）、南北２間分（約2.8m）を検出しました。柱穴のうち３基には柱根が遺存しており、北壁にかかった西側柱の柱根を取り上げたところ、柱根の直下に据えられた直径10～30㎝程度の石を確認しました。これは、柱の沈下を防ぐ工夫（根固め）と考えられます。総柱建物の南側では、南壁沿いに東西に並ぶ２基の土坑の北端部分を検出しました。この東隣では、南北棟建物の北妻部分と考えられる柱穴３基の北半部分（梁行約3.0m）を検出しました。なお、土坑のうち東側の１基は、南北棟建物の西北隅柱柱穴に一部を壊されていました。南北棟建物の北側、調査区の北壁沿いには、井戸の底部南辺（幅約1.6m）がかかっていました。その埋土からは土師器の杯が出土しました。井戸の南側には、小振りの柱穴が東西に２基並んでおり、小型の井戸屋形が存在した可能性が考えられます。

遺構が認められなかった調査区中央をはさんで、調査区の東側では、約７mの間隔をあけて２本の南北塀が並行していました。西側の南北塀は柱穴３基を、東側の南北塀は柱穴４基を検出しています。調査区東端部では遺構を検出できませんでしたが、湿地由来の粗砂からなる自然堆積土が厚く堆積する状況を確認しました。自然堆積土からは、５世紀後半の埴輪片が出土しています。この堆積は西側に向かって傾斜し、これより上層は丁寧に整地されていました。

上記のほか、調査区西部では、整地土である暗褐色土直下に黒褐色土が局地的に広がり、ここから小型丸底土器２点や布留型甕の小片等、古墳時代前期の土師器が少量出土しました。

今回の調査により、調査地周辺がかつて湿地帯であり、７世紀になって本格的な整備がおこなわれるなかで、建物群が展開した様子があきらかになりました。藤原京の時期にかけて、土地利用が活発化した様子がうかがえます。

大官大寺南方を対象とした一連の調査は今回でひと区切りをむかえましたが、今後も周辺地域の調査を進め、藤原京造営期およびその前後を含む通時的な土地利用状況を解明していく予定です。

（都城発掘調査部　山藤 正敏）

調査区全景（南西から）

総柱建物西側柱の根固め石検出状況（南から）